

特集 育友会主催

# 就職懇談会 ダイジェスト

子供が直面する就職活動への理解を深めるために、育友会では今年も就職懇談会を開催しました。現在の就職環境やスケジュール、大学の支援体制、就活経験者の声、公務員試験対策など、盛りだくさんの講演内容をダイジェストでお届けします。



## 01 就職情報サイト編集長による講演 就職を取り巻く環境変化と 支援の在り方

学生／企業への影響を理解し、  
有意義なサポートを考える

(株)リクルートキャリア リクナビ編集長 大家純一

就職情報サイト「リクナビ」の編集長が語った3つのこと。保護者世代との就職環境の変化、現在の就職環境、そして、保護者としての接し方。



### 保護者世代との就職環境の違い

就職活動の変化について見ますと、現在では情報の入手方法はWEBが主流になっています。かつての就職情報誌に掲載されていた企業は3,000社程度でした。それが現在、WEB上には2万社を超す情報が出ています。興味ある企業があれば、ワンクリックでエントリーでき、学生は選べる企業の幅が拡大しました。そして、企業は応募者が増えたために、より効率的な採用を追求するようになっています。

エントリーしたら次に学生はエントリーシートを提出しますが、エントリーシートを書くのにかける時間は1社あたり平均2時間くらいで、提出数は30～40社です。会社説明会に参加する数は平均15社。内定は昨今の就職環境下では2.04社が平均値になります。学生はたくさんエントリーをし、企業はたくさんの学生から効率的に採用していくというのが現在の就職環境といえます。

某飲料品会社の例をご紹介します。この企業では40人の採用数に対し、エントリーした学生が1万4,000人いました。そのうちエントリーシートを提出し合格したの

が2,500人です。そして説明会参加者が1,800人になります。筆記試験に合格した学生が500人。その後、1次面接に合格した学生が150人。2次面接に合格した学生が60人。最終的に40人が内定しました。

就活はとにかく落ちるものと思っておください。それまで学生は落ちる経験があまりなかったかと思いますが、就職活動では落ちることが前提になります。落ちて、自分自身の存在が駄目なのではなく、「その企業と合わなかった、準備が十分できていなかった」くらいに考えていただけたらと思います。

### 業界、企業で違う求人倍率、スケジュール

リクルートワークス研究所の調べでは、現在4年生で就職活動をしている学生の求人倍率は1.78倍。2015年以降、4年連続で高水準の売り手市場を維持しています。求人倍率は景気と連動します。しかし現在、それほど景気が上がっているという実感のない中で、なぜこれほど求人倍率は上がっているのでしょうか。そこには労働人口が減少し、人手が足りないという社会背景があるのです。

従業員規模別の求人倍率を見ますと、300名未満の中

小企業では6.45倍、一方で5,000名以上の大企業では0.39倍になります。大企業と中小企業との差は拡大しています。業種別では、製造業が2.04倍。金融業はもともと企業数が多くありませんので0.19倍です。非常に求人数が増えている流通業は11.32倍。このように従業員規模や業種によって採用倍率は大きく異なります。

学生の就活ではいわゆるBtoCと呼ばれる、一般の方に認知されている企業にエントリーが集中する傾向があります。しかし、世の中の9割以上は企業間取引をするBtoB企業になります。隠れた優良企業に目を向けるのが就活成功のポイントといえるでしょう。

続きまして、採用スケジュールについてお話しいたします。ポイントとなるのは、2017年6月1日のインターンシップの開始、そして2018年3月1日の解禁日、さらに6月1日の面接解禁日です。注意すべきは、これらは経団連の倫理憲章に加盟した企業に限ったスケジュールだということです。その他の企業にとっては関係ありませんので、3月の解禁日から選考がスタートします。

就職みらい研究所のアンケート結果によると、多くの企業で3～5月に面接を実施しています。そして6月1日の時点で、1社でも内定を取っている学生は61%になります。多くの企業は倫理憲章に関係なく、早く学生に接触して内定を出しているのです。

### インターンシップを活用し、「働く」を知る

私も学生の相談に乗ることがありますが、就活の躓きの要因として、企業研究不足、業界研究不足、自己分析不足という声が圧倒的に多いです。3月から就職活動がスタートし、6月には半分以上の学生が内定を得るといふ短期スケジュールですので、就活が始まってから準備するのでは遅いのです。

どんな業界のどんな仕事に就きたいか、自分はどんな人間なのか、といった企業研究と自己分析は3月までに準備することがポイントになります。そのためにはインターンシップの活用が有効になります。インターンシップは「働く」を知れる機会です。企業側の実施率も学生の参加の割合もここ数年で大きく増加しています。就職活動を終えた学生にアンケートした結果、インターンシップに参加していた学生の方が、「就職活動が成功した」という実感を持つ割合が高い傾向が出ています。

### PDCAを意識して学生生活を送る

1970、80年代は市場自体が成長期でした。企業は既定のルールに沿って進めば、売り上げが上がりました。そうした時代に求められたのは、決まったことをやりきれ人材です。しかし現在、飽和した市場で、企業は限られたシェアを奪い合うという厳しい戦いに晒されています。正解が見えない中、課題を設定し、その場でアジャストしながら、最適な答えを見つけていく。そういうこと

ができる人材を、企業は求めています。

そうした企業の要求に対応するためにも、学生にはPDCAを意識した学生生活を送ってほしいと思います。Plan（計画）－Do（実行）－Check（評価）－Act（改善）。昔でしたらDo、どれだけやれるかということが求められました。今は、勉強にしろ、部活動にしろ、やったという事実だけでなく、その行程をどう評価し、結果を出すためにどう改善していったのかが重要です。1、2年生でも貴重な体験をきちんとPDCAを意識して行動していただけたらと思います。

### 保護者ができる支援、そして就職とは

このような就職環境の中で、保護者にはどんな支援ができるでしょう。お子さんから就活について相談をされたら、どう対応したらいいでしょうか。一番のお勧めは、「就職課に相談に行ってみたら」と声をかけることです。企業、学生からの情報が一番多く集まっているのが大学の就職課です。まずは就職課に行ってみることが、解決の近道かと思えます。

就職活動における保護者の関与で、嬉しかったこと・役に立ったことの調査結果を見てみましょう。1位が「励まし・いやし・心の支え」。2位が「大人・保護者・社会人としてのアドバイスをくれたこと」。3位が「個性を尊重・自分に一任・自分の活動を肯定してくれたこと」でした。あとは5番目に「金銭的な支援」。7番目に「食生活・生活面などでの支援」があります。

就職活動とは、そもそも何でしょう。いい会社から内定を得るのが成功と近視眼的に捉えている人も多いです。しかし内定はゴールではなく、あくまでスタートです。これから長く働く上で、どうキャリア設計するかが非常に大事になります。現在60歳が定年、再雇用で65歳まで働くというのが一般的かもしれませんが、日本全体の労働人口が減っていますので、皆様のお子さんはおそらく70歳くらいまで働く社会環境になっているかと思えます。70歳まで働く想定して、どういったキャリアを積んでいくか、就職活動はそれを考えるきっかけになるでしょう。

日本ではよく、「就職」ではなく「就社」といわれ、入った会社で一生働き続けるのがいいことと思われてきましたが、昨今こうした風習も変わってきています。どの会社に入るかよりも、どういう「職」を身に付けるかがポイントになると思います。

まとめです。1つ目、保護者世代とは就職環境も仕事・キャリア観も変化しています。2つ目、現在就職環境は良いですが、活動期間は短いです。そして、会社選びに正解はありません。本人の納得感を大事にしてあげてください。3つ目、保護者の皆様は聞き役に徹し、サポート的存在になってください。お子さんの意見を否定はしないでください。

ご清聴ありがとうございました。